コラム　平成 24 年 2 月 8 日
吉備古代史への私の歴史 1

私自身がどうして吉備古代史に興味を持ったのが、その歴史を書いて見よう。

そもそもうちの親父は歴史談義が好きで、小さい時から自然に NHK の大河ドラマは毎年見ていたと思う。岡大附属中学の 1 年生の時、教育学部からの教生の先生が吉備路を自転車で走ろうと言いだした。先生の名前も覚えてもいないのだが、私ともう一人の友人と先生の三人で岡山から吉備路を総社まで走った。我々中学生の自転車は変速機のついたスポーツタイプだったが、先生の自転車は黒くて重い昔ながらの自転車で、必死にこいでいたのを覚えている。白黒のハーフサイズの写真が残っているが、造山古墳に上った時、近くのおじさんが家の庭に招いてくれて、円筒埴輪を見せてもらった。また今年話題になった千足古墳では中を覗いたのだが、水はなかったようだ。鮮烈な印象を持ったわけではないが、中学 1 年生の時のこの経験がたぶん私の古墳人生のベースにある。

高校 1 年の模擬試験では、「邪馬台国大和説と九州説のどちらかによって、日本統一については、どのような意味の差があるのか」という問題があった。当然「邪馬台国九州説なら 3c には日本は統一されておらず、大和説ならのちの大和朝廷だから日本は統一されていたことになる」と答えなければならない。

高校 3 年の受験期には、ちょうど井上靖の小説「敦煌」を読んだ影響で、シルクロードの民族興亡史に興味を持ってしまった。受験に必要な中国史は特に入念に勉強したし、日本史も関連してとても力を入れた。これが基礎学力になっていると思う。昭和 48 年の春に東大に入学し、その年 1 年間はシルクロードの民族興亡史を調べて、イラン、インド、中国にかけての 50 年ごとの歴史地図を作製することに没頭した。経済の勉強なんて、麻雀以外はやらなかったが、経済学なんてかけ麻雀を大きくしたようなものだとも思っていた。1400 年代まで 30 枚ほどの歴史地図を作ったところで、「支配ってなんだろう。人の心なんて支配出来ないのではないか」と感じて、地図作成を辞めた。

丁度その年、教養の講義で考古学をとったのである。黛弘道さんという学者が、当時発掘が始まっていた山陰の四隅突出墓について教えてくれた。この頃ようやく弥生墳丘墓という概念が登場したのだが、楯築はまだ掘られていない。大学 2 年になると吉備の古墳に猛烈に興味がわいて、地元の間壁忠彦さんや西川宏さんの著作を何度も何度も、隅から隅まで読み、岡山に帰るたびに古墳めぐりをやった。特に 5 万分の 1 や 2 万 5 千分の 1 の地図を買ってきて、分布図を作ったり、平面図を並べて書いたりと、とにかく全国の古墳の平面図を集めた。この頃神田の書店で岡山県内の古墳の発掘調査報告書を探して買いあさった。この時代、山陽町の山陽団地の弥生住居などの発掘が進んでいた。

大学 3 年の時、メキシコを訪問したのだが、メキシコシティーの国立人類学博物館を見て感動した。たくさんの再現模型があり、またマヤのピラミッドが都市ごとにある事を知り、翌年大学 4 年の夏には一人旅で 2 週間メキシコのマヤのピラミッド巡りを挙行した。当時はまだマヤにはほとんど日本人観光客も入っておらず、マヤ語も解読されていなかった。ユカタン半島のある遺跡では、日本の飛鳥時代の寺院の瓦にある蓮華紋と同じものを発見して写真にも収めている。今年 2012 年はマヤ歴では最後の年ということになっているが、マヤでは我々の世界は 3 度滅んで 4 度目の世界だという言い伝えがあったのだ。大学 3 年、4 年には経済学部にはいたけれど、文学部の考古学の単位を 8 単位取得した。吉備の古墳の平面図を並べて比較したレポートでちゃんと優をもらっている。この頃の吉備の古墳に対しては、「なぜ造山古墳は天皇陵ではないのか」という疑問が強烈に残っており、これが今日まで続いている。

ちょうどこの時代、鈴木武樹という人が「東アジアの古代文化を考える会」というのを作って、いわゆる皇国史観に対して猛烈に批判的な季刊の本を出版した。相前後して朝鮮の三国史記が和訳され、初めて百済や新羅の歴史を日本語で読めるようになった。大学を卒業する前の 1 年間は、休みのたびに岡山に帰って、鉄道模型レイアウト「夕凪鉄道」を制作していたが、「古墳のあるレイアウト」とサブタイトルをつけて、湯迫車塚古墳を 1/150 で再現した。昭和 52 年春に大学を卒業するとまた古墳めぐりを再開、地図作り、古代史本の収集など猛烈に古代史の勉強に没頭した。女房とのデートは必ず古墳めぐりだったものだから、女房はいつも新品の靴をぼろぼろにされたと、結婚後に聞かされた。

食品会社の経営が仕事だったが、全国を営業で回る機会を得、ちょくちょく古墳を訪ねることもできた。昭和 60 年頃からは、奈良と和歌山を担当したのだが、これは中央市場を午前中に営業でまわって、午後は古墳めぐりをするためであった。奈良県、大阪府の巨大古墳はかなり回ることができた。書店では必ず新しい本には目を通し、お金の許す範囲で購入していった。やはり研究では線を引きながら読むことが大切である。しかしこの間、鉄道模型はお留守になり、内田百閒顕彰事業など始めたものだから、古墳めぐりは停滞していた。家を建てた時、今度は庭に 1/150 で造山古墳や仁徳天皇陵古墳を掘って、堀に水を入れて子供と遊んでいたら、翌日見事に女房に埋め戻されていた。

平成 2 年、内田百閒文学賞を仕掛けて岡山県が募集を始めたのだが、県総務部長が集まらなくて困っているという。丁度その時、九州の内田百閒ファン二人が、岡山の古墳めぐりツアーに来ると言うので、どこを見たらいいか相談された。そこで箸墓の 1/2 と言われる岡山市浦間茶臼山古墳を訪れるように言った。ところが後から手紙が来て、「岡山はひどい所だ。タクシーに乗って浦間茶臼山古墳へ行ってくれと言ったのに、中山茶臼山古墳に連れて行かれた。岡山の観光はどうなっているのですか」と。とにかく岡山の古墳だけでなく、観光についても地域の歴史についても、こんなことでは駄目だと思った。だけど古代史についてはいいドラマを書いて、もっと多くの人に興味を持ってもらわなければとも思った。そこで一念奮起、吉備古代史長編小説の執筆を決意。平成 3 年「勾玉の首飾り」原稿用紙 430 枚脱稿、内田百閒文学賞落選。その翌年の平成 4 年から 2 年間、広島の財界誌ビジネスセミナーで、挿絵付の連載がされた。その後ある人が地元山陽新聞で本にしてもらえと勧めてくれて、出版部長に会ったが、「お前のは、むずかしすぎる」と言われた。雄略天皇時代の吉備の歴史を書いたのだが、すべて西暦を入れて書いた。天皇の没年には古事記没年干支を採用、三国史記の記述をふんだんに採用した。主人公は日本書紀に一カ所出てくる吉備の尾代。後の伽耶の臣の祖先で、吉備田狭の弟という設定。吉備の前津屋が滅ぼされたのは、田狭など吉備上道が裏切ったという筋。一方のテーマは仏教の日本伝来。主人公・尾代は 451 年の倭王済・允恭天皇の時代、中国南朝宋の都健業に使節として行った時、敦煌から来た僧侶に逢い、倭国・吉備に連れて帰るという筋。

その後この小説を知った地元山陽放送は、番場ふみおさんと歩く吉備路というラジオ生放送番組で、私を「郷土史家」として起用してくれた。地元の浜家アナも同行して、3 時間あれこれしゃべったこともある。雑誌の取材などもあったが、吉備古代史について講演したのはわずかに 10 回ほどか。百閒や路面電車は 200 回以上やってるが、本当は一番長いのが吉備古代史なんだがな。しかし最近の神社学などには十分な知識がない。古墳も今となってはそれほど歩いているほうではない。すべてが中途半端な勉強になっているのは間違いない。